

## 説教者修道会の福者ハインリヒ・ゾイゼ(概要)

Sel. HEINRICH SEUSE (1295(?) – 1366), O.P.(注1)

(Eine Skizze)

ユエルグ・マウツ

Jörg Mauz

### INHALTSANGABE

Diese Skizze gibt das Leben von Heinrich Seuse im “Zeitraffer” wieder: die Lebensdaten, den geschichtlichen Hintergrund, den Lebensweg, das schriftstellerische Schaffen und die Nachwirkungen(vor allem im Hinblick auf Seuses Schriften). Die Anmerkungen und die Literaturangabe bieten Gelegenheit, sich tiefer mit der Materie zu befassen. Der Verfasser bedankt sich bei allen, die ihm mit Rat, Anregung und Kritik geholfen haben, diesen Text auf japanisch zu erstellen.

### 梗概

この概要は、ハインリヒゾイゼの生涯を“quick motion”で再現するものである。

内容は、主としてゾイゼの経歴、彼が生きた歴史的背景、彼の人生行路、彼が著した著作とその余韻から成る。注と参考文献は、さらに深い研究の一助になう。本稿の著者は、日本語での出版に際して、多くの助言、励まし、批判を持って助けてくださったすべての方々に感謝する次第である。

木版：(別紙参照)

「選ばれた神の友に向けられる酷しい試練」  
(神谷完訳『ソイゼの生涯』、152頁)



1) 経歴(注2)

- 1295年(?) : ボ - デン湖畔のコンスタンツ市 (Konstanz am Bodensee) あるいはユ - ベルリンゲン市(Überlingen)で生まれる。
- 1308年 : 小神学生(志願者)としてコンスタンツのドミニコ会修道院(Insel-Kloster)に入る。
- 1313年 : 「回心」してコンスタンツのドミニコ会修道院でドミニコ会に入会する。
- 1322年 : 修道会の基礎教育を修了した後、ケルン(Köln)のドミニコ会大神学校(Studium Generale)へ博士課程で勉強するために派遣される。
- 1326年 : 博士課程での勉強を修了した後、コンスタンツのドミニコ会修道院へ帰る。
- 1327-1334年 : 修道院内の教師(すなわち修道院内の教育係)に任命される。
- 1334年 : リュッティヒ(Lüttich)(リエ - ジュ/Liège)へ呼び出される : ドミニコ会のトイトニア(Teutonia)管区本部が対ゾイゼの異端起訴裁判を提起する。判決は無罪、しかし教師の資格が停止される。
- 1334-1339年 : 在コンスタンツの修道院に帰ってから修道院内にて“隠修生活”。
- 1339-1346年 : コンスタンツから移住を命じられる。在シュタイン・アム・ライン(Stein am Rhein)の「集い」の長上。
- 1346-1348年 : コンスタンツへ帰って、そこで司牧活動する。
- 1348年 : 認知請求起訴において、中傷される : コンスタンツにてトイトニア管区集会裁所の判決 : 無罪。同年、ウルム(Ulm)のドミニコ会修道院へ転任を命じられる。
- 1348-1366年 : ウルム(Ulm)の修道院にて滞在する。自書を校訂して編集する。
- 1366年 : ウルムの修道院にて帰天。
- 1831年 : 列福。

#### 4 ユエルグ・マウツ

##### II) 歴史的背景 (注3)

- 1291年： スイス同盟(Schweizer Eidgenossenschaft)成立。
- 1298-1308年： ハブスブルク家(Haus Habsburg)のアルブレヒト(Albrecht)一世王在位。ハブスブルク家は、ホ - エンシュタウフェン家(Haus Hohenstaufen)の伝統を引き継ぐ。
- 1308-1313年： ルクセンブルク家(Haus Luxemburg)のハインリヒ(Heinrich)七世：
- 1308年： 王に即位；1312年： 皇帝に即位。
- 1314年： 二人の皇帝の選出：  
ヴィッテルズバッハ家(Haus Wittelsbach)のパヴァリア人のル - トヴィヒ(Ludwig der Bayer)：1314年：王に即位；1328年：皇帝に即位。

##### 対

- ハブスブルク家(Haus Habsburg)の『美男子』・フリ - トリヒ(Friedrich der Schöne)：1314年：王位を主張。フリ - トリヒは、軍事面、政治面においてル - トヴィヒに対して敗退する。1330年：死去。
- 1323年： ル - トヴィヒは、イタリア領土へ代行を派遣する；教皇ヨハネス二十二世は、ル - トヴィヒに対立して、不正に王位を主張したことと異端支持のために、裁判を提起する。ル - トヴィヒは、ニュルンベルグ市(Nürnberg)で「教会会議」に控訴する。破門と秘跡停止が続く。
- 1328年： ル - トヴィヒはロ - マでロ - マ市公務員によって皇帝に即位される；教皇ヨハネス二十二世は退位宣言される；フランシスコ会修道士ニコラウス五世が対立教皇として宣言される。教皇と皇帝の関係は、「犬猿の間柄」になる。
- 1338年： レンズ市(Rhens)での選帝侯会議は、『リチェトゥ・ユ - リス』(Licet iuris：法律上にて)法令を宣言する：すなわち、皇帝の選出は、教皇とは関係なく、王権による選挙のみで

行われる。と同時に『フィデム・カトリカム』(Fidem catholicam:カトリック信仰にしたがって)声明を発表する:すなわち、秘跡停止を無視する、教皇裁判所への起訴は禁止すべし、という内容である。同年には、ル-トヴィヒがコブレンツ市(Koblenz)でイングランド(England)の王エドワード(Edward)三世に謁見して皇帝総代理権を授与し、フランス(France)王権を承認する。

- 1340-1346年: ル-トヴィヒは、対教皇ヨハネス二十二世、ベネディクトゥス十一世(1334-1342)、クレメンス六世(1342-1352)との和解が不成功に終わる。
- 1345年: トリ-ル(Trier)大司教ルクセンブルグ家のバルドゥイン(Balduin von Luxemburg)は教皇と和解して教皇の支持上にルクセンブルグ家出身の皇帝後を推薦する。
- 1346年: ル-トヴィヒ皇帝死去する。
- 1346-1378年: ルクセンブルク家(Haus Luxemburg)のカ-ル(Kar)四世:1346年:王に即位;1355年:皇帝に即位。
- 1348年: 神聖ロ-マ帝国領土内でプラハ(Prag)に最初の大学設立。
- 1355年: ニュルンベルク市(Nürnberg)とメッツ(Metz)市で諸侯会議が開会され、『金印勅書』(“Bulla Aurea”、“Goldene Bulle”)が宣言される、すなわち皇帝選挙法が決定的に規定される。
- 1365年: ウィ-ン(Wien)大学設立。
- 1370年: シュトラールズント市(Stralsund)の平和協定締結:デンマ-ク王国に対して戦勝したことにより、ハンザ同盟(Hanse)は、東欧や東北欧領土において政治的に最高潮になる。

---

一般の社会状況では次の点が目立つ:

- a) 『災い』が多い:不作、蝗、飢饉、生活必需品の高騰。
- b) 『黒死病』(“Schwarzer Tod” = Pest):帝国領土内では、「黒死病」が人口の3分の1を奪い去る。反ユダヤ人の迫害が増加する。天に

6 ユエルグ・マウツ

対して和睦を得るため、鞭打ち苦行者行列が盛んになる。

c) 『都市化』：14世紀中に都市が非常に盛んになるし、「都市の空気は自由をもたらす」(“Stadtluft macht frei!”)という流行語になって、「地方」に魅力を及ぼす。帝国直属市が生じ、コンスタンツ市はその一つとなる。帝国直属都市、主に南ドイツ領土の都市は皇帝と帝国の側に立つ、以前の司教座都市は司教から独立する。

d) 都市、並びに騎士同盟が、利益のために結成される。

1309年 - : 『教会のパピロニア補囚』が続き、教皇はアヴィニオン市 (Avignon) に居住する。

「神の故に苦しむ者に与えられる騎士道の榮譽」  
(ゾイゼに騎士の誉れたる指輪を授ける永遠の知恵)  
(神谷完訳『ゾイゼの生涯』、181頁)



### III) ゾイゼの『人生行路』（注4）

1) 「ゾイゼ」“Seuse”、又は「ズ-ズ」“Sues”；

「ズ-ソ-」“Suso”(ラテン化名)、と言う氏名を説明して：

語源を見れば、“Seuse”という名前は、ドイツ語動詞“säuseln”（さわさわ音を立てる；ざわめく）に由来するし、又はドイツ語名詞“Suser”（発酵中新葡萄酒）から派生したものと考えられる。ゾイゼ自身も説教を始める前に“Jetzt kommt der Sauser!”（「さあ、「鳴りがしや」がやって来た！」（?））という決まり文句で自己紹介した。ゾイゼは商売名称に指示する、すなわち「新葡萄酒商売人」という意味になると考えられる。

2) ゾイゼの親の家について：

ハインリヒ・ゾイゼの父親は、現在スイスのトゥ-ル州(Thurgau)のベルク(Berg)城下町の出身で下級貴族の騎士資格をもち、『フォン・ベルク』(von Berg)という名字であったが、剣を注文控え帳と交換して、城からコンスタンツ市へ引っ越し、商売人となる。

母親はユ-ベルリンゲン市(Überlingen)出身の非常に信人深い女性で、長男であるハインリヒには、彼が母親の名字を受け継ぐ程に大きな影響を及ぼす。簡単に言えば、ゾイゼが“母親っ子”であるし、彼自信の言葉を借りれば、「小さい時から愛に憧れる心があった」(„...hatte von klein an ein liebesbedürftiges Herz.“)。母親はこの憧れを満足させると同時に主イエズス・キリストへの超自然的な愛に導く。逆に父親は、信仰に対して疎遠な、冷たい態度を見せる。妹もいる。彼女も後に修道女になる。ある期間 修道会の道を外れるが、兄の努力によって修道院に戻る。ゾイゼには、貴族の家系があるという誇りがあるが、傲慢にならずに、死に至るまでこの誇りをもち、いつも「聖職騎士だ！」(“Geistlicher Ritter”)との意識を保つ。虚弱であった体質は、ゾイゼにとって大きな問題となっている。

3) ゾイゼの青年時代と修道会養成

13歳になり、教育を受けるためにドミニコ会修道院に派遣される。5年間の基礎教育を修了後、彼自身の言葉に従って『回心』したと書いてある。即ち、自分の意志でドミニコ会に入会する。後に、ゾイゼがその「5年間」

を反省し、聖職販売罪を起こしたか、沢山の疑念が生ずる。ケルン・ドミニコ会大神学校滞在中、マイスタ・・エックハルト(Meister Eckhart)によってその疑念から解放される。この点に関して、ゾイゼが虚弱な体だけでは無く、同時に非常に敏感な良心を持っている事が理解出来る。高等教育のためにケルンのドミニコ会大神学校へ派遣される。神学はゾイゼにとってあまり問題は無かったが、「旅行」は苦しかった。なぜかといえばコンスタンツからケルンまで全て徒歩で行かなくてはならなかった。道の状況は、現在と違って、全く発達していなかった。ゾイゼの弱い体には、“十字架の道”に等しかった。ケルンでの勉学と研究の成績はゾイゼには、パリのソルボンヌ(Sorbonne)大学での教師としての未来を開く可能性を与えられ、学問界で先輩であったエックハルトの志を継ぐ夢も生じる。

#### 4) コンスタンツの修道院での活動

ケルンから戻り、修道院内の「教師」(Lektor)に任命されて修道会内教育と教育統行の任務に励む。ゾイゼは、異端告訴を直面していたエックハルト(Eckhardt)を密かに弁明するために『真理の書』(“Büchlein der Wahrheit”)を執筆するが、この著作の「お陰」でゾイゼ自身も告訴に直面することになる。管区内裁判所では、異端審問官も出席したが、無罪となった。教師の資格は剥奪される。後に修道院内で「隠修生活」と同時に司牧活動も行っている。それは主にドミニコ会修道女たち、並びにベギン(Beginen、すなわち準修道女)の「霊的指導を行う」事であった。ところが、男性に対する司牧活動は、あまり成功しなかった。

#### 5) 亡命期間と「つどい」の長上

教皇と皇帝間の対立は、コンスタンツ市とドミニコ会修道院にまで影響を及ぼす。具体的には秘跡停止を守るか、否かとの点で先鋭化する。コンスタンツ市は、皇帝を味方にし、コンスタンツ司教とコンスタンツの修道士や修道女たちに対して、「秘跡停止が廃止されないなら、聖職者、修道士、修道女がコンスタンツ市から追放される」との強迫を宣言する。コンスタンツのドミニコ会修道院は、従順の誓願に従って教皇支持者となって、シュタイン・アム・ライン町(Stein am Rhein)と他の場所へ亡命する。ゾイゼは、シュタイン・アム・ラインの「修道士の集い」の長上になる、と



同時に全く教育や体験の無いまま飲食物係も果たす。

#### 6) コンスタンツでの最後の滞在と認知請求事件

コンスタンツに戻ったゾイゼと修道会の修友たちは、「粉」となった修道院を目の当たりにする。結果として一人ずつ市内の決まった地域へ乞食に行かなければならなかった。乞食をすることによって得た食料で自分の責任において食事を作る。そのような状況でゾイゼはある女性に出会い、彼女に食事を作って貰う事になる。その女性は、時が過ぎた後男の子を産み、ゾイゼに対して認知請求の噂を広める。もう一人の女性がゾイゼの所にやって来て「赤ん坊を針で刺して「事件」を片付けるよう」と提案する。ゾイゼはその提案を拒否し、どうにか赤ん坊のために家を探し、幸いに見つける。噂は、修道会の修友たちの耳にも入るし、コンスタンツで開いた管区会議中の裁判でゾイゼに対して裁判が行われるが、結論は二つである。まず一つ：ゾイゼは無罪である。もう一つ：彼は、評判がもう潰れているため管区長の命令でウルム市(Ulm)の修道院に転任しなければならない。

#### 7) 在ウルム修道院での「晩年」

ウルムにいる期間中のゾイゼの主な仕事は、自分の著作を新しく校正し、その校正した著作を編集して『典型本』(“Musterbuch”)を作成することである。帰天した後、ウルムのドミニコ会修道院に葬られるが、ゾイゼの墓は16世紀、宗教改革に際して、ゾイゼに対する尊敬が盛んになったことで、ゾイゼの墓へ巡礼者が来ることを恐れて、見分けられない所にする。

#### 8) ゾイゼの特徴

##### A) 苦行者

修道会入会から30年間修得に献身するために様々な方法を用いて「対肉」への戦いを堪え忍ぶ。その一つは、釘で満ちた板を寝台にし、睡眠時間を少なくする。対性欲のために釘の皮ズボンに制服の下に着る。許された休憩は取らず、葡萄酒は主の降誕祭と復活際のみ飲む。修道会に広まっていた「締まりの無い」態度とは正反対である。したがって、ゾイゼにはそれ程人気が無かった。主イエズスに対する愛を表す為に“IHS”(「イ」、「エ」、「ス」)の3文字を入れ墨として胸に刻む。

B) 対修道女達の靈的指導者：

司牧の面では、「対群集」の活動ではあまり成功していないが、逆に個人指導は大変上手く、ある修道女はゾイゼの「靈的な娘」(“Geistliche Tochter”)になる。具体的な例を挙げると、自分の妹を開放するために修道会を退会した「無くなった羊一匹」を探すために、軽蔑と冷笑を浮かべた修道会の兄弟達の虐めを無視して、真っ白な顔で、聖務共唱の祈り中そのまま聖堂をさる。どこに行っても良いか分からないまま、ただ「妹を見つけたぞ！」という決意をもって行く。数日後、彼女を見つけた時涙を流しながら妹を抱いて、修道会に帰るように説得する。その他「軽就職婦人」の面倒も見るが、殆不成功しない。

C) 神秘家：

疑念、誘惑、試練を通して、夢(Träume)や幻(Gesichte)を体験しつつ、不偏心(Gelassenheit：捕われない心、自己を捨て去る心)を得て信仰の神秘を悟る恵みを身に付ける。

D) 神性恋愛の詩人：

エックハルトやタウラ - (Johannes Tauler OP)と並んでゾイゼは中世ドイツの神秘家の「第3の柱」と呼ばれるに値するに違いない。彼はドイツ語を大事にして、ラテン語版を作成したカルトゥージア修道会士のラウレンティウス・ス・リウス(Laurentius Surius O. Cart. (1523 - 1578))による、「(ゾイゼの)ドイツ語表現は私のラテン語訳では至らない程に雅趣があった」(“Sermo eius Germanicus habet gratiam adeo, ut Latino sermone eam assequi non potuerim.”)という発言が出る程上手く取り扱っている(注5)。

貴族に属する愛の詩人が「現世の楽しみと美しさ」を賛美しながら、ゾイゼは貴族という家系を忘れずに、愛を全て主イエズス・キリストと聖母マリアに注ぎながら「永遠の上智」を賛美する。ゾイゼにとって「知恵」とは、旧約聖書の「知恵の書」に由来し、新約聖書の「御言葉」を経てキリストに達する。ゆえに、ゾイゼによる知恵は、「純粋な神性の湧き出る源泉」(“ausquellender Ursprung der bloßen Gottheit”)であるし、神性の位格と顕現である(備考6)と同時に、美しい形、即ち「美しいのおとめ」

(Schöne Jungfrau)、「気高い美男子の青年」(Edler Jüngling)、「賢い女教師」(Weise Meisterin)、「華麗な愛の女人」(Stattliche Minnerin)、「心から愛する者」(Herztraut)、「心の皇妃」(Herzens Kaiserin)、「楽しき復活の日」(Fröhlicher Ostertag)、「心の内の夏の歓喜」(Herzens Sommerwonne)等として現れる。これ以上に沢山のギリシャ語・ラテン語の単語を「ドイツ語化する」(verdeutschen)。一つの例を挙げると、「有頂天」(ecstasy (英) ekstasis (ギ・ラ語))と言う表現を“AUFGEZOGENHEIT”で表している(注7)。大和の言葉でいえば、「かみ(神?、上?)に心ひかれたこと」になる。

「幼子イエスを抱いたマリアによる慰め」  
(神谷完訳『ソイゼの生涯』、166頁)



IV)ゾイゼの著作(注8)

一般文献：聖書、Aristoteles, Dionysius Areopagita, Augustinus, Bernhard von Clairvaux, Thomas von Aquin.

1) 『自叙伝』(“Vita”)

1336年から密かにゾイゼの「靈的な娘である」エリザベト・シュタ-ゲル(Elisabeth Stagel OP)がゾイゼの生活体験を記録する。在ウルム期間中ゾイゼがこの本を公正して『典型本』に入れて編集する。言葉：ドイツ語。

2) 『永遠の上智の書』(“Büchlein der Ewigen Weisheit”)

1327年から1334年までコンスタンツにいる間に作成された本：主イエスの受難を黙想して、自分自身が体験した苦難を聖書と信仰を基礎にして確認する。言葉：ドイツ語。後にラテン語版も作成：『上智の時計の書』(Horologium Sapientiae)。

3) 『真理の書』(“Büchlein der Wahrheit”)

1326年コンスタンツに住んでいた間作成された本：「内的な超脱」(Innere Ledigkeit)についての論文：理性の助けにより良い識別を得る事。この論文の中でエックハルトを弁明したことから、ゾイゼに対して異端起訴が起こる。言葉：ドイツ語。

4) 『靈的手紙小集』(“Kleines Briefbuch”)

ウルム滞在中『典型本』に付け加えられた11通の司牧書簡：靈的娘エリザベト・シュタ-ゲルが保存した書簡は、ゾイゼの回心から神秘体験になる神との一致までの段階を紹介している。言葉：ドイツ語。

5) 『典型本』に保存されていない著作

A) 『靈的手紙大集』(“Großes Briefbuch”) :

エリザベト・シュタ-ゲルが保存した28通の司牧の書簡。言葉：ドイツ語；題名はエックハルト伝統にしたがってラテン語で書いてあるが、例外は第28の手紙：『恋愛の遺言』(“Testament der Minne”)である。

B) 『説教集』(“Predigtbuch”) :

4つの説教。内容は判読部分的に不可である。説教の題名はラテン語で書いてある。

C) 『愛(ミンネ)の書』(“Minnebüchlein”) :

『永遠の上智』の内容の概論；ゾイゼ著作は異論がある。

「様々な苦難を意味する薔薇の花環に囲まれたゾイゼ」  
(左上方の雲間から差し出された十字の後光を発する手は  
神の御心を象徴する)

(神谷 完 訳『ゾイゼの生涯』、74頁)



V) ゾイゼの余韻 (注9)

1) ゾイゼの書の外国語版と印刷

A) フランス語版：1389年に『知恵の時計の書』は、“Orloge de Sapience” par frère Jehan(sic!) de Soubshaube”という題が付けられてフランス語訳写本が作られる。

1439年、又は1499年にパリで印刷する。ス・リウスのラテン語訳を使用して、

1586年、1614年にパリでゾイゼの全著書が印刷される。同じラテン語訳に従って『永遠の上智の書』と『真理の書』がパリで1684年、1701年に印刷される。

B) イタリア語版：イグナツィオ・デル・ネンテ (Ignazio del Nente OP) はフィレンツェで1624年に『福者エンリコ・スソ・ネの生涯と霊的全著作集』(“Vita ed opere spirituali del beato Enrico Susone”)を出版する。後にロ・マで1663年に、パドヴァで1675年に、パリで1697年に印刷する。

C) 英語版：15世紀に『上智の時計』は、一部が『純粹愛の7点』(“The seven poyntes of trewe loue or Orologium Sapientiae”)という題名で英語版の写本にされ、後に1490年にてウエストミンスター (Westminster) で印刷される。最初の印刷は、1483年に“Horloge de Sapience”という題名で出版される。

D) ラテン語版：15世紀にあるカルトウウジア会修道士がゾイゼのドイツ語の著作のラテン語版を作成する。在バ・ゼル、又は在ニュルンベルグのドミニコ会修道院図書館にて保存されるが、後に所在不明になる。1512年に最初のラテン語印刷に従って、カルトウウジア会修道士ラウレンティウス・ス・リウスがケルン(Köln)のクエンテル (Quentel) 出版社で1555年にて“Heinrici Susonis Opera”という題でラテン語版を出版する。後に1588年、又は1615年にケルンで、1658年にはナポリで再印刷される。1661年ケルンではアンゼルム・ホフマン (Anselm

Hofmann) がス - リウスのラ版を使用して、再びドイツ語版を作成する。

- E) デンマ - ク語版：15世紀中 聖ビルギッタ修道女会のある修道院で『上智の時計の書』をデンマ - ク語版にする。
- F) スウェ - デン語版：1500年ごろ二人の聖ビルギッタ修道女会員、すなわちカ - レン・イエ - ンスの娘(Karen Jens' Tochter)とキルスティン・ハンスの娘(Kirstin Hans' Tochter)が『上智の時計の書』を『神を敬う霊への目覚ましもの』(“Wecker gottseligen Geistes”)という題でスウェ - デン語版にする。

- G) 『典型本』のドイツ語版は11冊の写本。『自叙伝』(別)は2冊の写本。『永遠の上智の書』は、羊皮紙の7冊の写本、15世紀21冊の紙の写本、高地ドイツ語；中地ドイツ語は3冊；低地ドイツ語は21冊。『真理の書』は、2冊の写本。『霊的手紙小集』は4冊。『典型本』は1482年に、又は1512年にはアウクスブルクで印刷される。
- H) 『上智の時計の書』(“Horologium Sapientiae”)の印刷：1470年(?)にパリで、1492年、1536年にヴェニスで、1496年にケルンのヨハネス・ランデン(Johannes Landen)出版社で、1501年、1503年、1509年には又ケルンで印刷される。1511年に更にパリでジャン・ペチ(Jean Petit)の出版社で、1578年には同出版社で『聖ゲルトルディスの霊操』(“Exercitia S. Gertrudis”)の中に印刷され、1658年にナポリで印刷される。言葉：ラテン語。

## 2) ゾイゼの影響

主にイエズス会士聖ペトルス・カニジウス(S. Petrus Canisius S. J.)とフリ - トリヒ・フォン・シュベ - (Friedrich von Spee S. J.)、神秘家 アンゲルス・シレ - シウス(Angelus Silesius)と テルステ - ゲン(Tersteegen)、並びにヘルデル(Herder) とロマン主義(Romantik) に影響を及ぼす。

VI) 参考文献

- Bihlmeyer, Dr.Karl(Hrsg.): Heinrich Seuse. Deutsche Schriften. Stuttgart 1907(Nachdruck: Frankfurt a.M. 1961). Mittelhochdeutscher Text(中世ドイツ語) .
- Borst,Prof.Dr. Arno: Mönche am Bodensee. 610 1525. Sigmaringen 1978.
- “Der Große Duden”, Bd.7: Etymologie. Mannheim/Wien/Zürich 1963
- Hofmann,Georg(Ürs.,Hrsg.): Heinrich Seuse. Deutsche mystische Schriften. Düsseldorf 1983. - Moderner Text (現代ドイツ語) .
- PLOETZ. Deutsche Geschichte. Epochen und Daten(Hrsg.:W.Conze u.a.).Freiburg i .Br. und Würzburg 1983(3.Aufl.) Verlag Ploetz.
- Schneider, Oda(Ürs.): Heinrich Seuse O.P. Das Büchlein der Ewigen Weisheit. Stein am Rhein 1987(2.Aufl.) Christiania.
- 鈴木 宣明『中世ドイツ神秘靈性』南窓社、1991年。
- 高橋 正男 監修『ロ - マ教皇歴代誌』創元社、1999年。原著：Chronicles of the Popes(P.G. Maxwell-Stuart), London 1997.
- Wörterbuch der deutschen und japanischen Sprache(Hrsg.: R. Schintzinger u.a.). Tokyo 1981.

最近ドイツ神秘家に付いての出版された著作：

- 神谷 完 訳『ゾイゼの生涯』ドイツ神秘主義叢書 5、創文社、2000年。
- 神谷 完 訳『永遠の知恵の書・真理の書・小書簡集』ドイツ神秘主義叢書 6、創文社、1998年。
- 上田開照『エックハルト・異端と正統の間で』講談社、1998年。
- E.Rucker SVD・高橋編：『タウラ - 全説教集』I - IV巻、行路社、1989年 - 1999年。



VII) 注

- 1) 『説教者修道会』はラテン語で“Ordo Praedicatorum”と言う。普通は、修道会創立者聖ドミニコ(Sanctus Dominicus)の名前を使用して『ドミニコ会』とも言われる。ゾイゼの修道名は、“Frater Amandus”(『愛される者』という意味)である。
- 2) Bihlmeyer,\*3頁 - \*163頁参照。
- 3) PLOETZ,81頁 - 90頁参照；高橋正男『ロ - マ教皇歴代志』、152頁 - 177頁参照。両方の文献の中には、『ゾイゼ』の名前が出て来ない！
- 4) 鈴木宣明『中世ドイツ神秘霊性』、185頁 - 198頁参照；Bihlmeyer,\*03頁 - \*163頁；Bihlmeyer、07頁 - 195頁；Borst、246頁 - 263頁；553頁 - 554頁参照。
- 5) Hofmann, 206頁第5 備参照。
- 6) 関連する新約聖書の個所は、1コリント1・24：「...神の力、そして神の知恵キリストである。」(“Christus..., Gottes Kraft und Weisheit”)；コロサイ2・3：「...知恵と知識の全ての宝は、キリストに隠されてある。」又は、「...キリストの内には...、知恵と知識との宝が、一切隠されている。」(“Christus..., in dem alle Schätze der Weisheit und Wissenschaft verborgen sind.”)。
- 7) 基礎になる 動詞は、“aufziehen”である。即ち：「(旗等を)引いて上げる」；「(時計等を)巻く(昔は時計を動かすために目方を引き上げた。)」；「(誰かを)虐める。」「有頂天」と言う表現は現代ドイツ語で“Verzückung”になる。
- 8) Bihlmeyer, 01頁 - 554頁参照：中世ドイツ語；Hofmann, 15頁 - 399頁参照：現代ドイツ語、『典型本』のみ。
- 9) Bihlmeyer,\*157頁 - \*163頁参照。

「永遠の知恵と魂との霊的婚姻」  
(神谷完訳『ソイゼの生涯』、4頁)

